

# 「階級社会」変えるために

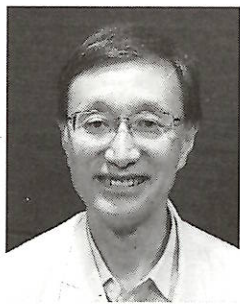
## 仲谷医師が奨学生に民医連を語る

5月17日に道北勤医協一条通病院が中心になって開催した奨学生のオンライン学習会「オロロンプロジェクト」(588号で紹介)の内容と、講師の仲谷了医師の呼びかけを紹介します。

後に仲谷医師は、奨学生たちに呼びかけました。

変えたいと考えています。

学習会では、一条通病院に相談したKさんに関わった職員と仲谷医師が交代で事例を紹介しました。



糖尿病を抱えているKさんは体調不良で働けなくなったため、旭川市の実家に戻り、母親と暮らします。しかし、歩くことも難しい状態で、介護に疲れた母親が一条通病院に相談しました。すぐに無低を利用して受診してもらい、ソーシャルワーカーが役所に連絡。生活保護の申請を相談しました。しかし、持ち家に住む母親はリバースモーゲージ(自宅を担保にした借入れ)を使っているため、保護が利用できないと言われてしまいました。しかし、何度も保護課の担当者と粘り強く交渉し、保護を利用することができました。

◇ ◆ ◇

今回の事例では、民医連の強みを生かして全職員でケアの道筋をつけることができました。しかし、『民医連は無低を使って困窮者を治療してすこい』という話になったり、眉に唾を吐けてください。

今回の事例では、これまでの政権の尻拭いをしていくにすぎません。本来はすべての国民が救われなければならないのに、無低を使える医療機関は限られています。

臨床の場合から、格差と健康の実態を明らかにしていき、医療従事者に情報提供をしていく。そういった活動は、私たちの守備範囲ではないと言われるかもしれませんが。でも、患者さんを通して背景が垣間見えることがあり、それが疾病に対してどういった影響を与えるかということは、私たちが一番よく分かっています。多くの医療従事者に対して働きかけをするのが私たち民医連の役割ではないかと考えています。

この事例について、奨学生たちに感想や意見を聞きながら、「私たちは何をすべきか」を考察。学習会の最後に

こつした事例は、これまでの政権の尻拭いをしていくにすぎません。本来はすべての国民が救われなければならないのに、無低を使える医療機関は限られています。

今回の事例では、ソーシャルワーカーが何度も役所に連絡し、市の職員と情報を共有して良心に訴え、信頼する力」が人を動かしました。きっとその積み重ねが社会の変化につながるのではないのでしょうか。

この事例について、奨学生たちに感想や意見を聞きながら、「私たちは何をすべきか」を考察。学習会の最後に

こつした事例は、これまでの政権の尻拭いをしていくにすぎません。本来はすべての国民が救われなければならないのに、無低を使える医療機関は限られています。

今回の事例では、ソーシャルワーカーが何度も役所に連絡し、市の職員と情報を共有して良心に訴え、信頼する力」が人を動かしました。きっとその積み重ねが社会の変化につながるのではないのでしょうか。

この事例について、奨学生たちに感想や意見を聞きながら、「私たちは何をすべきか」を考察。学習会の最後に

こつした事例は、これまでの政権の尻拭いをしていくにすぎません。本来はすべての国民が救われなければならないのに、無低を使える医療機関は限られています。

今回の事例では、ソーシャルワーカーが何度も役所に連絡し、市の職員と情報を共有して良心に訴え、信頼する力」が人を動かしました。きっとその積み重ねが社会の変化につながるのではないのでしょうか。

この事例について、奨学生たちに感想や意見を聞きながら、「私たちは何をすべきか」を考察。学習会の最後に

こつした事例は、これまでの政権の尻拭いをしていくにすぎません。本来はすべての国民が救われなければならないのに、無低を使える医療機関は限られています。

今回の事例では、ソーシャルワーカーが何度も役所に連絡し、市の職員と情報を共有して良心に訴え、信頼する力」が人を動かしました。きっとその積み重ねが社会の変化につながるのではないのでしょうか。